広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	俳句の研究
Author(s)	ムラド ネシロフ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 33期 : 37 - 45
Issue Date	2018-10-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046572
Right	
Relation	

俳句の研究

ムラド・ネシロフ

１．俳句との出会い

自然の中に身を置いて、その魅力を感じた時、頭に何か言葉が浮かびます。詩人はその言葉を上手に組み合わせて詩に作り上げます。でも、その作り方、言葉の選び方、組み合わせる音の数といったものは国によって、あるいは民族によって違いますし，人によっても違います。

アゼルバイジャンの詩も種類がたくさんあるのですが、大部分は長く、韻を踏み、流れるような声で音楽的に詠みます。私は詩に興味を持っていたので、日本文学の授業では日本の詩について勉強する時、熱が入りました。アゼルバイジャンでは有名な武人や王様は戦の時や恋をした時、また自分の強さを誇示する時に詩を作って詠ったそうです。ですから、日本でも昔、侍が詩を作ったに違いないと思い、いったいどんな詩を作ったのだろうかと興味を覚えました。

まず和歌の形式の一つ、「長歌」というものについて学んだのですが、これは五・七・五・七・・・五・七で長く続き、普通の詩のようになっています。それから長歌と対極にある「短歌」について学びました。これはその名の通り短い歌です。万葉集に集められていて、各時代を通して最も詠まれた形式だそうです。これはアゼルバイジャンの民話の中でもっともよく詠まれていて、アゼリー詩で一番短いと言える詩、バヤティー（Bayatı）とだいたい同じぐらいのサイズです。短歌は五・七・五・七・七の３１音ですが、バヤティーのほうは、音の数が同じ七・七・七・七で終わる４行、２８音で詠まれます。どちらも内容は季節の情景だけでなく、戦や平和、恋や友情など色々あります。

俳句の授業でアゼルバイジャン人の先生は、俳句は五・七・五で詠まれ、季語を必ず使うと教えてくれました。先生が使っている資料はロシア語や英語からの翻訳だったので、時々細かい間違いが混じる場合もありました。ですから、そんな詩はあり得ない、たぶんそれは先生の翻訳の間違いだろうと思い、授業の後で、自分で調べてみました。そして、インターネットで調べると、先生が言ったとおり、五・七・五の十七の音のみで詠われ、世界で最短の定型詩と説明されていました。俳句を詠む俳人は、まわりを眺め、目の前の景色の美しさを心で感じて、言葉を選びだし、その心情を五・七・五の音で表現します。そして、それを読んだ人は、その情景を目に浮かべます。しかし、俳人の眺めた風景と読んだ者が思い浮かべるものはかなりちがいます。その俳人が詠んだ情景は本人にしかわかりません。

俳句についてちょっと勉強した後、授業で聞いて耳に残った有名な俳人、松尾芭蕉の俳諧を読んで、その情景を思い浮かべようと思いました。最初の一句

古池や　蛙飛び込む　水の音　　松尾芭蕉

これを読むと、五歳まで生まれ育った田舎の家の近くにある、たくさん蛙が住んでいる池のことを思いだし、懐かしく思いましたが、確かに松尾芭蕉が眺めた池や蛙とは全然違うでしょう。そういう段階から俳句の魅力がだんだんわかってきて、俳句をもっと勉強して、俳人にはなれなくても、五・七・五の音の数で様々なことが表現できたらいいなと思いました。

それで、広島大学の日本語日本文化研修生になる機会を生かし、指導していただく先生と相談した上で、研究テーマを「俳句の研究」と決めました。

２．俳句と文法

これから俳句を始めようとする人、俳句を始めて間もない人、特に俳句に興味がある外国人が、実際に作ってみようとしたら、文法の使い方で悩む人が結構多いと思います。この章では、俳諧には、いったいどれぐらいどのような文法が使われるのか、そして現代の会話でよく使う口語文法を使って、俳句が詠めるのかどうかを考察し、それについて書きたいと思います。と言っても、俳句で用いられる文法のすべてではなく、詩でよく目にかかれる、最も使われる文法をいくつか選んで、意味や使い方、それから、ほかの文法と違う点を検討し、最後に現代日本語の口語文法を使って詠まれた俳句をいくつか紹介します。

検討したい文法は：過去の助動詞「き」「けり」、完了の助動詞「つ」「ぬ」、終助詞「な」「も」「かな」、間接助詞「や」です。

2.1 過去の助動詞「き」「けり」の違い

一般的に二つの使い方の違いは以下のように説明されます。

「き」＝　直接体験の過去
「けり」＝　間接体験の過去・詠嘆

「き」は自分が直接体験した事柄を詠む時に用いる。つまり、「ありき」という言い方をすると、詠んだ内容は、自分がかつて見聞きしたことだとという意味になります。

それに対して、「けり」は自分が体験したことではなく、他の人から聞いたこと（話）、本などで読んで知った過去のことを表します。そして、俳句の切字としてよく使われる「けり」は「詠嘆」の意味を表します。

それでは基本的な例を見てみましょう！

いくたびも　雪の深さを　尋ねけり　　正岡子規

子規が亡くなるまで病床生活を送ったのは、東京根岸の子規庵でした。ここで母と妹の献身的な看護を受けました。冬のある日、雪が降ったのですが、障子にさえぎられて、庭の様子が見えません。病床から動けない子規は自分で外を見て、雪の深さを確かめること

ができません。それで、雪がどれくらい積ったかを尋ねたわけです。「いくたびも」には雪を喜ぶ子規の気持ちが表れているようです。子規庵にガラス障子を虚子(きょし)が入れてくれたのは、その後、明治 32 年です。

この「尋ねけり」は間接経験なのでしょうか？違います！　これはまぎれもなく、俳人の自分の体験でしょう！これは、「尋ねた」という過去の意味ではなく、「尋ねたのだなあ」という「詠嘆」の意味を表します。「けり」が用いられた俳句の多くは「詠嘆」を表すのだろうと思います。

西条や　梅雨雲の裏　日はありき　　ムラド・ネシロフ

これは私が詠んだ句です。ベランダから空を見ると、雲の後ろにわずかですが、日の光が見えていました。私が直接経験したことなので、過去の助動詞の「き」を用いて、その心情を伝えようと思いました。ここで「日ありけり」と「けり」を使って、「詠嘆」を表しても、確かに間違いではないのですが、リズムを考え、「き」を用いました。

2.2. 完了の助動詞「つ」「ぬ」

「完了」というのは、「過去・現在・未来と関係なく、継続している動作・作用・状態が完全に終了していること」を表します。「た」「してしまった」という意味です。

「つ」は、作為的・人為的な意味を持つ動詞(他動詞)に接続することが多い。
「ぬ」は、無作為的、自然的な状態で用いられる動詞(自動詞)に接続することが多い。

助動詞「つ」はもともと「棄（す）つ」であったと推定されています。「棄つ」の「棄」が脱落して、「つ」だけが残ったそうです。「棄つ」は現代語でいえば、「棄てる」です。「棄てる」という行為は自分の意志で行うので、「つ」は行為的、人為的な意味を持つ動詞によく接続されます。具体的は「見つ」「据ゑつ」「語りつ」「告げつ」のような接続をします。

私はこの研究をするまで、俳句で用いられる「ぬ」という助動詞は「ないで」「ない」という「否定」を表すのだろうと思っていましたが、調べてみると、これは否定ではなく、過去の「た」、それとも「してしまった」という意味だとわかりました。「ぬ」の語源としては、ナ行変格活用「往（い）ぬ」だと考えられています。「往ぬ」から「往」の部分が脱落し、「ぬ」だけが残ったそうです。

「往ぬ」は現代語では「去る」になります。「去る」とは、ある対象が自分の意志とは関わりなく、向こう側の都合でいなくなってしまう、つまり、去る者＝相手は自分の意志と関係なく離れてしまいます。だから、「往ぬ」から派生した「ぬ」は無作為性、自然性を意味します。

具体的には「来ぬ」「行きぬ」「過ぎぬ」「帰りぬ」「近づきぬ」、そして、自然の推移を持つ動詞で「風吹きぬ」「雨やみぬ」のように使われます。

具体的に例を見てみましょう

・助動詞の「つ」

夏雨に　濡れつ語りつ　男坂　　小國佐世子

この俳句で「男坂」というのは、「神社や寺などで二つある坂のうち、急な方の坂」と説明されています。俳人はその坂で雨に降られたのですが、濡れながら話をしたのだろうと思います。きっとここで語っているのは俳人自身でしょう。

・助動詞の「ぬ」

数へ来ぬ　屋敷屋敷の　梅柳　　松尾芭蕉

現代語で「数へ来ぬ」は、「数えてきた」になります。江戸時代は道の両側に屋敷が並んでいて、屋敷の庭にはたくさん梅や柳の木があり、芭蕉は道をゆきながらその梅と柳を数えたようです。

2.3. 終助詞「な」

終助詞とは、文末に加わって、文全体の叙述をまとめ、断定、詠嘆、呼びかけ、希望などの意を相手にもちかけるものだと説明されます。日本語で昔よく使われた終助詞としては「な」「そ」「なむ」「もがな」「も」「かし」「かも」「かな」などがあるのですが、私が考察したいのは俳句でよく目にしても、意味が理解できない「な」「かな」です。

まず、禁止の終助詞「な」を取り上げます。

「な」は現代語で「スルナ」になり、禁止を表して、終止形とよく接続します。

ふるさとの　此松伐るな　竹伐るな　　高浜虚子

木が切られるため、今ほどエコロジー問題が社会で取り上げられていなかった時代の句です。虚子は田舎に帰った時、あちらこちらで松や竹が伐られていたのでしょうか。二回用いられた「伐るな」は現代語でも「伐るな」になりますが、松と竹を特定して呼びかけるような禁止表現となっているため、作者の強い気持ちがこの句に表れています。

2.4　間接助詞「や」と終助詞「かな」の比較

間接助詞は、語の下に接続し、意味を強めたり、調子を整えたりします。この「や」は様々な語に接続して、詠嘆の意味、呼びかけを表し、意味を強める場合があるそうです。

そもそも係助詞であった「や」は疑問・反語を表し、結びの連用形は連体形だったようです。俳句の雑誌などを熟読していらっしゃる方々は、「や」を見ると、これは切字じゃないのかと違和感を感じるのではないでしょうか？実は、「疑問・反語」だった係助詞「や」が発展して、現在用いられている切字になったそうです。

現在「や」は「か」と同じ意味を持ち、疑問・反語を表すと思われていますが、古代、「万葉集」の和歌が作られた時代には、意味、そして形も違っていたようです。「や」＝「か」ではなかったのです。

大野晋の研究によると、「や」はもともと「自分で、そう確信している」ことを表し、その下に「イカニ（＝どうだろうか？）」が来る表現です。使い方も現在と違い、次のような形でした。

古い使い方＝降る　雨**や**
現代の使い方＝雨**や**　降る

そう聞くと、松尾芭蕉の有名な句が思い浮かびます。

古池**や**　蛙飛び込む　水の音　　松尾芭蕉

芭蕉がこの句を万葉の時代に詠んでいたら、「蛙飛び込む　古池**や**」になるのだろうと思います。

終助詞の中で俳句の切字として最も用いられているのは「かな」のようなので、次に「かな」について考察しようと思います。「かな」は句末、すなわち一句の一番最後に置くのが原則です。そして、強く詠嘆を表す切字です。単純に用いられることもありますが、古代には、終助詞「も」を伴って、「かも」と使われることもよくあったそうです。奈良時代の「かも」が平安時代に「かな」に変化したと考えられています。

先ほど説明したとおり、「や」と「かな」は句で使われる場所が違うのですが、もう一つの違いはこの切字の強度にあるのではないでしょうか。

1. *初富士の　かなしきまでに　遠き**かな***　　山口青邨
2. *初富士**や**　草庵を出て　十歩なる*　　高浜虚子

巧みに作られているこの二つの句で「かな」と「や」を比較すると、「かな」のほうが柔らかな印象を読者に与えます。

青邨が詠んだ 1.の句は、しみじみとした感慨があります。一方、虚子の句は、家を出てすぐに視界に入った初富士への驚きを鮮明に表しています。虚子の句を、少し変えてみましょう：

a. 初富士**や**　草庵を出て　十歩なる
b. 初富士の　草庵を出て　十歩**かな**

a. と比べると、b. は初富士の姿がゆるやかに感じられます。

異論もありますが、「や」は「かな」よりも強い切字と考えられています。

2.5　「かな」と「けり」の比較

それでは、「かな」と「けり」はどう違うでしょうか。

一般的に、「かな」は名詞、あるいは形容詞に接続するのに対して、「けり」は動詞に接続することが多いようです。それ以外に、次のような違いもあります。

「けり」は、詠嘆の助動詞ですが、もともとは、ある事実にハッと気がつく、「気づきの助動詞」だそうです。

*赤とんぼ　筑波に雲も　なかり**けり***　　正岡子規

空は秋晴れで､遠くに見える筑波山の上には一片の雲もない。そんな空を一匹の赤とんぼがゆうゆうと飛んでいるのに気づいた子規は、その詠嘆の心情をこの句で伝えたようです。しかし、「けり」は「過去」の助動詞ですから、たぶん子規はその景色を見た時ではなく、あとでこの句を詠んだのでしょう。「かな」の詠嘆とはちょっと違います。

*赤黄色　ががらの山の　もみじ**かな***　　浮田 三郎

浮田先生は秋に広島大学に通うようになって、通りかかるたびに、大学の近くにある、ががらの山の秋の景色、赤や黄色のもみじの魅力を句に詠んでいます。浮田先生がこの句で「かな」を用いて表した詠嘆には、「あれっ、もみじかな？」という曖昧さが秘んでいます。それゆえ、秋の寂しさを赤くもあり、黄色くもあるがからのもみじの色で訴えているのでしょうか。

ここで、「かな」と「けり」の切れの強さの違いが浮かび出ます。上の句でも見た「かな」の詠嘆のほうが、しんみりとして、深いという印象を与えます。それに対して、助動詞「けり」の詠嘆は、赤とんぼが、突然、目に留まった時の感動を表しています。

3 アゼルバイジャンの詩と日本の詩

さて、この章ではアゼルバイジャンの詩と日本の詩を比較してみます。アゼルバイジャンの詩は日本の詩では、和歌の長歌と比べたほうが適当だと思うのですが、ここでは俳句と比較していきます。

アゼルバイジャンの詩は音の数によって３種類あります。

1. 音節（Heca vəzni)、つまり音の数が同じ 4 行か 5 行でできており、一行の音の数は 4 音から 16 音の長いものまであります。
2. アラビア詩の形式(əruz[1] vəzni)で、アゼルバイジャンの古典詩で最も使われている形式です。音節の多い行と少ない行を組み合わせ、きれいな変化を作ります。
3. 自由詩(sərbəst vəzn) は、音の数など構わず自由に詠みます。

[1] アラビア語で「広い道」という意味になります。

「俳句との出会い」の章で、アゼルバイジャンのバヤティという詩の形式に触れました。形としては俳句にもっとも近いのですが、バヤティには季語のようなものはあまりありません。故郷や友情、恋愛が話題になります。4 音節、４行でできるのですが、最初の２行には意味がなく、リズムを合わせるだけです。詩の意味、言いたい内容は後半の２行にあります。

1.	Mən aşiq sini, sini,	意味がない
2.	Doldur iç sini, sini.	
3.	Mənə öz yarım gərək,	私には恋人が必要だ
4.	Nəylirəm özgəsini?	他の人は要らない（他の人をどうするというのか？）

1.	Əziziyəm, dilən gəz,	意味がない
2.	Bağda gülü dilən gəz.	
3.	Qürbətdə xan olunca,	異郷で王になるより
4.	Vətənində dilən gəz.	自分の国で貧しく暮らせ

二つのバヤティは、三行を自由に作るだけで、ほかの行は合わせるリズムを示すだけです。バヤティはトルコ民族[2]の民話に使われる詩で、作者は明らかではなく、「人々が詠って、口から口へと伝えられてきた」と言われています。

話題とするものは俳句と違いますが、言いたいことを短く、少ない音で表すのは同じです。

ここで俳句をバヤティの形に翻訳してみます。

梅一輪　一輪ほどの　温かさ　　服部嵐雪

Əzizim, gül açanda	
Bağçada gül açanda	
Havalar istil şir	気候が温かくなる
Gavalı gül açanda!	梅が咲くと

ここで最初の２行は適当にリズムを示すだけなので、「花が咲くこと」という意味で言葉遊びをしました。

アゼルバイジャンのよく知られた詩の一部を日本語に翻訳して、俳句と比べてみましょう。

Payız gəldi, uçdu getdi quşlar,	秋が来て、野鳥が飛んで行った
Sən də getdin, bax, yağdi yagişlar.	君も行ったので、ご覧、雨が降ってきた

[2] Turkic nation – Azerbaijan,Turkey, Khazak, Uzbekistan, Kyrgyzstan, Turkmenistan, Uyghurs .....

Payiz gəldi, qərib oldu dəniz,	秋が来て、海もよそよそしくなった
Bu dənizin gozü yaşlı sənsiz.	君がいないと、この海も泣きだす
・・・	
Bəxtiyar Vahabzadə	バフチィヤル・ウアハブザデ

この詩で、詩人は言いたいことをすべて詩に盛り込んで終わります。俳句の場合、詩はそれだけで終わらず、そのあとに何か来ます。

遠山や　目玉に写る　とんぼかな	小林一茶
Uzaq dağlarda gözümə çarpan, iynəcədirmi görəsən?	Kobayaşi İssa

この句で遠くの山がトンボの目に映るのですが、そのトンボは何をしているのか、はっきりしません。一茶はそれを読者の考えるままに任せたのでしょう。ですから、この句を詠むと、トンボは飛んでいたのか、何色だったのかは読者の意識しだいです。

４．私の目から見た俳句

俳句には色々な説明が加えられますが、ここで私が俳句とはどんなものと思うかについて、これまで調べてきたこと、そして中川先生と話していて考えたことをすべて合わせて書きます。

4.1　俳句とは「絵」

俳句とは言葉で描かれた絵だと思います。俳人は景色を眺めて、3 つか 4 つぐらいの少ない言葉で描いた絵です。私がこの絵の一番素晴らしい、魅力的と思う点は二つあります。

1. この絵の見ても、俳句を詠んだ人が描いた元のイメージを頭に浮かべることは無理です。俳人によって巧みに描かれたこの絵を見た人、読者が思い浮かべるイメージは全然違うでしょう。俳人が自分の家の近くにある木を仰ぎ見て、句を詠んでいても、それを読むアゼルバイジャンの読者は、どうしてもアゼルバイジャンのどこかにある自分の家の庭の木の絵を思い浮かべるでしょう。
2. 俳句で描かれた絵はただその時目に入った景色だけではなく、動いているイメージもあります。現在の撮影技術でできる「Animated GIF」が昔から詩人には言葉でできたのではないでしょうか。たとえば：「梅一輪一輪ほどの暖かさ」という句を読むと、梅の木が一輪一輪花を咲かせる動画が思い浮かばないでしょうか。

4.2　俳句だけに見られること

アゼルバイジャンや欧米の詩と俳句の違いは長さだけでなく、ほかにもあります。

1. 俳句だけ、句末に付く助動詞や助詞が大事な意味を持っています。もしその助詞や助動詞を変えれば、その句の意味や強さは変わります。欧米の詩は一番大事なことが詩の中央にあるのですが、俳句では句の中だけでなく、一番最後に付けられる助動詞も大事なものになります。（『俳句と文法』の章でこれについて書きました）
2. 俳句の切字は「ここで終わる」ことを意味しますが、多くの俳句を見ると、切字の後も句が続いているものがあります。「古池**や**蛙飛び込む水の音」で「や」は終わりを示すはずですが、完全な終わりではなく、まだ続くということのでしょう。句末の切字も句が終わることを示すのですが、そこに示されたプロセスがまだ終わらないものもたくさんあります。

涼風の　曲がりくねって　来たりけり　　小林一茶

たとえば、これはきっと涼しい風を感じたときに、浮かんだのでしょう。「表通りから裏に入った裏長屋。その裏長屋の、またその奥にある我が家へ辿り着く涼風は、曲がりに曲がりくねって届くのだろうよ」（一茶？or だれ）と説明されている句ですが、「けり」という助動詞で句自体は終わるのですが、時間はまだ続いているようです。この句を読むと、涼しい風がまだ曲がりくねってどこかへ行くような気がします。

これで私の研究は終わりますが、これからも俳句をもっと勉強して、俳人にはなれなくても、五・七・五の音の数で様々なことが表現できたらいいなと思います。

資料

長谷川櫂　『俳句的な生活』、中公新書、2004 年
磯辺勝　『江戸俳画紀行』、中央公論新社、2008 年
高橋睦郎　『百人一句』、中央公論新社、1999 年
『俳句歳時記（合本）』、角川学芸出版、2008 年
『NHK 俳句文法心得帖』、NHK 出版、2011 年
福本一郎　『俳句と川柳』第 7 版、講談社現代新書、2005 年
中里富美雄　『芭蕉百句を読む』、青柿堂、2013 年
http://www.haisi.com/saijiki/natusame.htm
http://lalalan.com/haiku_sousaku/node/68
http://haiku-nyuumon.com/article/231092516.html
https://sxcn.exblog.jp/23722345/
浮田 三郎　特別講義『俳句』の資料
kayzen.az